

Title	ライン上りの想出
Author(s)	汐見, 三郎
Citation	経済論叢 (1934), 39(2): 298-300
Issue Date	1934-08-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/130475
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 二 第

卷九十三第

行發日一月八年九和昭

哀 辭
故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論 叢

骨牌税に就きて……………法學博士 神戸正雄
供給曲線の性質……………文學博士 高田保馬

時 論

輸出統制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研 究

貨幣的景氣論史……………經濟學士 柴田敬
金物價と貨幣價值安定……………經濟學士 松岡孝兒
アダム・スミスの廉價即豊富論……………經濟學士 白杉庄一郎

記 事

田島博士逝く
故田島博士年譜及著書論文目錄
追憶文

附 錄

織田 萬 神戸 正雄 山本 美越乃 財部 靜治
河田 嗣郎 本庄 榮治郎 小島 昌太郎 大國 壽吉
汐見 三郎 黒 正 巖 田 島 順 石川 興二
谷口 吉彦

新着外國經濟雜誌主要論題

ライン上りの想出

汐見三郎

大正十二年の秋深い頃、國際統計協會會議に出席する爲め、ハイデルベルグ大學の休暇を利用しブルツェルに向つた。偶然にホテルの廊下で田島錦治先生が柳澤保恵伯爵と快談してゐられるのを發見したのであ

る。田島先生の首唱でライン上りを試みる事となり柳澤保承氏と小生とが加はり都合三人で旅立つたのである。ケルンではドーム前のホテルに落ち着いたのであるが、英國に軍事占領せられ人心は安らかでなかつた。先生はベデカー所載の地圖を擴げ磁石によつて方向を定め、我等二人を案内せられたのである。翌早朝にライン上りの途に上つたのであるが、ボンの秋景色は先生を引きつけるに充分であつた。ライン沿岸の風物はいづれも先生にとつて想出の種ならざるはなく、時のうつるを忘れて夜に入りマインツに到着した。上陸すると占領地の軍隊と獨逸人との感情が尖鋭化し血腥い記事が新聞紙上に満載せられてゐたので、充分の注意を拂つた。數回にわたる佛蘭西軍隊の嚴重なる檢閲を通過してハイデルベルグに到着したのは其の翌日の夕刻の事である。此所は昔ながらの大學町としてライン沿岸の非常時風景とは自ら異なるものがある。十四世紀に設立せられた獨逸最古の大學の所在地であるから、事々物々いづれも先生の歴史慾をそそらざるなしと云

ふ様子であつた。占領地では安心して味へなかつたライン酒、モーゼル酒もハイデルベルグには豊富に先生を待つてゐたのである。並木道のホテルを出て古城を抜けネッカーを渡り哲學者道に足をのばし、落ち着いた學都の氣分に浸るのが數日間の日課であつた。電報に應じて黒正巖教授が出迎えに來られたので、先生はハイデルベルグを去りベルリンへ向はれたのである。かくして曾遊の地の獨逸國を再び訪れられたのであつた。

先生に親しく接したのは、ライン上りの此の二週間であつたが、當時の印象は強く頭に残つてゐる。第一に先生は壯健そのものであり普通人には到底味へない人生を持つてゐられたのである。時々夜ふかしの事があつても翌日は早く床を蹴り身仕舞をすまして我等を待つてゐられる。人一倍に味覺が優れ、人一倍に酒の香が分るのである。滅多に自動車を利用せず徒歩第一主義を貫き時々電車に乗られる事があつた。第二に「郷に入つては郷に従へ」を信條として西洋の儀禮を尊重

追憶文

し服裝飲食につき種々の注意を拂はれた事であつて、實は我等の豫期しなかつた點である。これ、ニチケツトを無視する事を得意とする所謂國粹主義者とは異なる所である。第三に飽くまで平民的に行動し、かの鬼面人を嚇かすと云ふ様な氣持を微塵も持つてゐられなかつたのである。誰彼の區別なく虚心坦懷に接して行かれる所は、先生の性格より生れ出た美德であらう。

田島先生と云へば、ハイデルベルグの並木道を元氣よく散歩してゐられた先生を想出すのである。白髪は年と共に加はつたが童顔は依然として變らず。永遠の青年であつた所に、田島先生の姿を見出だすのである。